日本戦没学生の遺書

小田切秀雄　窪木安久　編

読売新聞社

日本戦没学生の遺書

小田切秀雄
窪木安久
編

読売新聞社

日本戦没学生の遺書

昭和四十五年十二月一日　第一刷

定価四八〇円

編者　小田切秀雄
　　窪木安久

発行者　二宮信親

発行所　読売新聞社
東京都中央区銀座三の二の一　〒104
大阪市北区野崎町七七　〒530
北九州市小倉区明和町一の一一　〒802

大日本印刷・堅省堂

序にかえて

――この本が成るまでの経過――

窪木安久

この書がいま、ついに世に迎えられるの日を得た。編者としての宿願成就のよろこびは何ものにも替えがたいところであるが、同時に私の身をさいなんでやまないものは、戦後二十五年という歳月の、はかり知れない重みにほかならない。それは実に、本書が計画され、その原形が私の手もとにまとまってからの年月にもほぼ等しい。冒頭、とくに「この本が成るまでの経過」としたのも、今日、私にとって実にその一点だけが消し去り難い苦渋の回想となっているからである。

いたずらに空費した四半世紀への悔恨とともに、私はまた改めて個人の非力をなげく。しかしそれにもまして私の胸をとざすものは、かつての日、遠く異郷の戦野に非命に倒れた幾多の同時代の若い魂に対する、衷心からの自責の念である。以下の経過が単なる釈明の辞ととられるときの苦痛もまた、ここにおいて私は進んで甘受しなければならない。

――敗戦後の虚脱と、なまなましい戦争の記憶がまだ全身にうずいていた〝あの年〟の冬。学徒出陣の身を奇跡的に生きながらえて復員し、当時広島県・呉市にあった土肥女子学園の一教諭

として再起への模索をくり返していた私は、たまたま全く同じ境遇にあった三人の知友を得た。激動の時代、ゆがめられた青春。不安と苦悩をあらわにして共通の体験と記憶をかみしめる私たちは、時あるごとに会合し〝われら何をなすべきか〟を真剣に語り合っていた。その中で四人のいずれもが僅々六年前の平和な学生時代に手にした、「ドイツ戦歿学生の手紙」（岩波新書、ヴィットコップ編・高橋健二訳）の強烈な印象と感銘は、大きな話題のひとつとなったのである。

生還を期すべくもない戦火のさなか、刻々と迫りくる〝死〟をみつめる理性の哀歓。生へのわかれ、肉親との永訣。来るべき運命を自らの心に言い聞かせる意志の確立……極限の状況下におかれてなお、それらを赤裸々な人間性の表白として遺していったドイツの学生たち。これに対して、今大戦に全く同じ状況下におかれた日本の学生たちはどうだったろう。きびしい私信検閲の網の目を通して残されたものは、万人一律の必勝スローガンでなければ、差しさわりのない軍務の日録程度がせいぜいではなかったか。表面的にはたしかにその通りなのだが、しかし——。

あれだけの仲間が散り果ててなお、不毛のみが残るとは、誰が信じられよう。「ドイツ戦歿学生の手紙」から受けた感銘が〝日本戦没学生〟の遺文として残されていないはずはない。仲間たちの遺文を集めよう。学徒として共通する真率の魂の流露を、われわれはこの目で仲間たちの遺文に確かめたい。さらには何らかの形でその一部分なりとも世に送り、後世に伝えることができれば、生き残ったわれわれの、仲間に対するこの上ない手向けともなるのではないか。……

一座の空気の高まりのままに、私はただちに〝日本戦没学生の手紙編集委員会〟の設立を提唱

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

し、その推進役を買って出たのである。昭和二十一年一月末のことだった。委員会は土肥女子学園の私のデスクにおかれた。まず第一には、原資料の収集である。私は全国の国・私立大学、高専計八十九校の学生課にあてて、各校の学徒出陣戦没者とその遺族の所在を照会し、遺族リストを作ることとした。通信事情もままならぬ当時、約四百人にのぼるリストが完成して遺族への呼びかけが始まったのは翌二十二年二月一日、委員会発足から一年がすぎていた。私はしるした。

「祖国を離れた戦地にあってのつれづれの日記・手記、肉親への思慕、惜別のことば、さらには絶筆となった通信文・詩歌・遺書などから、三通程度、ご貸与願いたい。その際故人の軍歴、戦没日時、場所等を併記していただきたく……」さらに「原本は故人唯一の遺品であり、門外不出も当然と考えられるが、われわれの素志ご賢察の上、資料提供には特段のご協力を仰ぎたい次第」……と。この依頼に対する反響は予期以上のものがあった。提供を快諾される文面に加えて、編集委員会に対する期待と激励を率直にあらわにされる方々も二、三に止どまらなかった。

——遺族への照会は、しかし難航するところも少なくなかった。終戦時の混乱、転居・戦災による住所不明、一切を焼失して残念ながら協力しかねるむねの惜しんでもあまりある回答、さらには戦死公報とともにすべてを遺族の手で処分した等々、さまざまであった。それでも私のデスクへは、数々の貴重な青春の遺書がつぎつぎと集まってきた。それらは同年五月ごろまでには大半のやまを越え、ご回答のない分についての再照会などもあって、七月を終わったときの回答総数は百十三通と算えられた。うち遺文の提供はすべて六十四遺族であった。……

「御文早速仏前に供し喜せました……私共には他にかけがえ無き唯一人の男の子で御座いました。我家のタカラとも柱とも思い、心魂かたむけて大切に〳〵育てましたが、学半に急に召されました。……只今となりましては、……しみ〴〵となさけなく、諦め様とつとめつつも尚々諦め切れない思いで御座います。……お蔭様で何となく明るい気持になりまして……」（安東幸平氏）

「……ドイツ戦没学生の手紙なる本は戦没しました子供が買って読んだのが残って居ますが、あれも斯様な書中の人となろうとは思いもよりませんでした事でしょう」（村瀬博氏）

「……崇高な愛国の至情、家郷をおもい知人を思い又天地の物いわぬ一木一草にもやさしき心をよせし純真な学徒の精神は、永遠にこの百首の歌の中に生きていると存じます。何かの機会もあらば個人としてでも刊行いたしせめてもの慰霊といたし度存じて居りました……」（江村アサ氏）

「……当方、敗戦後の現況は戦没者の筆蹟を止むるに由なき気持よりして、応召当初より全部集束致し居候音信類一切を焼却仕候……本日漸く同封三通発見、（中略）日本軍隊の異常な検閲制度は、ドイツのそれの如き意志や思想の充分なる発現を見出し得ざるかと存じ候も、焼却の音信類中には今少し故人の片鱗を窺うに足るものもありしをと残念一入（ひとしお）の事に候……」（島津恵見氏）

さて、しかし以上の経過では〝編集委員会〟の名が表面に出ているというものの、実際活動の段階では、それはすでに有名無実とならざるを得なかった。発起人としての私がこの事業遂行の責任を一身に負うべきは当然のことである。しかし当初の私に、自らの提唱に対して寄せられた同志諸氏の最大級の支持が、そのまま全員の具体的な労力・経済力を結集しての共同作業開始に

つながるものと期待した一つの〝錯覚〟があり、これが実務進行に決定的なブレーキとなったことは否めない。私の提唱はあくまで〝発案〟の域を出ないものであり、三人の諸氏は純粋に精神的にこれに賛意を表したに止どまるとするのが至当だったのである。こうして〝委員会〟はその実質においてすでに私個人以外のものではなく、遺文を手にした私がしばらくをその写本づくりに没頭する間、三人の諸氏は次々と転職・転任の余儀ないままに私の交際範囲から去っていった。

私自身もまた、教職には宿命の〝異動〟につきまとわれていた。翌二十三年三月、心を濡らしながら〝原点〟の地・広島を離れ、富山・岐阜・愛知・東京と転々する間、一応の形をととのえた稿本は時を得ないままにその筐底に眠り、遺族の方々へのご報告も思うに任せず、言い知れない焦燥が身を焼くばかりであった。そしてこの間、ほとんど筆にし得ないショックとなったものが、あの「遙かなる山河に――東大戦歿学生の手紙」「きけわだつみのこえ――日本戦歿学生の手記」の二大遺稿集の刊行と、その相次ぐ爆発的なアピールぶりである。さきに各大学への照会を始めたさい、東京大学だけからは全く反応を得られなかった事情もこれで明らかだった。商業的競争、というような低俗な意味ではない。出版企画としての〝アイデアの本家〟を主張するようなつもりはさらにない。ただ個人の力の限界……打ちひしがれたように、私はこれらの圧倒的な世評の前に思わず自らの耳目をふさいだのである。

とはいえ私にはまた、ひるがえって片ときも身辺を離さないあの貴重な稿本を改めて見つめる余裕もわずかにあった。文庫の中から絶えず声なき声を私に叫びかけてきたこれらの遺文を、す

でに公刊されたものと比較するとき、あまりの内容の差に驚くのだった。周知のように前二書がある一定の意図のもとに遺稿の選択を行ない、組織的に編集されたことは疑えない。これに対して、全く無作為に私の手にした遺文は、一つには旧軍隊の検閲制度の徹底ぶりを物語るものともいえるが、まさに極端な好対照を示していた。当時の必勝スローガン調はいわずもがな、強烈な日本主義主張から戦争謳歌、さらにはいわゆる〝淡々とした死生観〟まで、「武士道とは死ぬことと見つけたり」を忠実に口移すの観さえあった。（これはどうだろう——ある意味ではマイナスではないか。あの両書に対抗する意味でこれらを世に送るタイミングは、あくまで疑問だ…）わずかに北九州のある大新聞社の旧知のデスクを頼って刊行計画の引き合いを考え、絶望ならば自費出版をとも志していた私は、この新しい発見に、また臆病にならざるを得なかった。

しかもこの二書に刺激されたように、その後あらゆる形で刊行された類書の数はたちまち数十点にも達した。遺稿ブームというような不謹慎な言葉さえ広まった。出版界の傾向、企画の流行などにはもとより無縁の私であり、ましてブームに乗る売り込みなど到底考えられぬままに、私の第二の生命ともいうべき六十四編の遺文の上には、再び空白の時間が流れていったのである。

しかし千載一遇というか、天恵のチャンスは、ほとんど測り難い偶然とともに訪れるものである。すでに二十余年を経た昨秋、私は海軍予備学生第三期生の靖国神社昇殿参拝に列していた。拝殿の奥から私にはっきりと呼びかける声に、私は耳を疑った。

「窪木、いまだ。早くやるんだぞー」

まぎれもない宇都宮秀一（四高―東大国文科、本書に遺稿所収）のそれであった。かつての日、旅順港のボート訓練で寒風の中から私を叱咤したあの声、その姿を、私はそこにまざまざと見たのだった。その日集まった旅順時代の同期生とともに読売新聞社の福永春彦氏との再会が私に与えられたとき、私は信じられぬほどの幸運に、思わず涙したのである。話はとんとん拍子に進んだ。かつて「きけわだつみのこえ」の編集顧問をされた法大・小田切秀雄教授の助言もいただき、読売新聞社出版局の多大のご理解によって、この書はいま、永い眠りから目ざめるのである。

――思うに「任重くして道遠し」とは、まことに現在の私の胸中を去来する実感そのものである。あまりにも重い歳月のへだたり……二十有余年前、発意のときにさかのぼって、痛恨は再び私の胸をみたす。「……有り難いお企を承りまして厚く御礼申上ます。（故人も）地下にてさだめし感泣いたして居ること〻存じます。……どうぞみなさまの目的達成の日を一日千秋の思いでお待ち申上げています」（安部千代乃氏）「……遺族にとりまして国家社会共に冷たい今日此の頃、それほどまでに思召し下さいます方々もいらして頂けますかと、胸つまる思いにて涙を新しく致しました……」（星野正直氏）「……御主意の程、亡き子供に取りましてもこの上なき慰霊となりますこと〻、尊き御尽力を深く御礼申し上げます」（水井正子氏）「はからざるも敗戦の現実を見せられ幾十万の殉国の士を無意味ならしめ彼等の壮挙も一条の煙りと消え去るを悲しんで居ましたが、思わざる御手紙を拝見致しまして……感銘一入のものがあります」（酒井マツ氏）「御懇情こぼる〻御来信を頂きまして、有り難感涙にむせびました。誠に御愛情こもる御計

画、時節柄定めし御苦心の御事と存じ上げます。完成の日の一日も早き事を……楽しみにまたせて頂きます……」（岩崎太郎氏母堂）

遺族の方々のご期待の大きさ。まことに断腸の日々でもあった。

「本人は長男で唯一の後継者として人物もよく頭脳明晰、努力勉励常に優秀な成績で通したもので、親として大いに期するものがありました」（河田多賀吉氏）「……学問したさが一杯で、大学への進学の事も知らず死んだあの子の事を思いますと、全く胸が張りさけるようでございます……」（松田艶子氏）「…来る日も来る日も今は亡き面影が偲ばれ、なつかしい声が耳朶にひゞいてまいります。この嘆きはもう私共の生のあるかぎり果なく……」（松山憲一氏母堂）

これらの方々のすべてがいまなおご存命であるとも、また信じ難いものがある。私はただ、この一書をもって私の新たな供養の始まったことを痛感するばかりである。

「……戦争そのものの善悪と戦場に出でて一身を捧げし者の心とは截然（せつぜん）として区別し、せめてその死を有意義なりしものと解し度きは戦死者遺族としての感懐でございます……」（中村史郎氏）

「戦没者が犬死であるとは遺族許りの嘆きではありません。寧（むしろ）、世評であります。何という情けない事でありましょう。併し御計画が成就すれば犬死とはなりません…」（白石実太郎氏）

いま私は、この限りない悔恨の中に改めて戦没者各位のご冥福を祈りつつ、遺族の方々にお約束を果たしたことをご報告したい。そして最後にひとこと〝彼らの死は決して無意味ではなかった〟と叫ぶの心境を、お許しいただきたいのである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

目次

序にかえて……窪木安久　1

第一部　若き魂

悠久の散華……13
理性の哀歓……67

第二部　帰らざる山河

久遠の青春……123
永訣の家郷……187
〝わだつみ〟の霊よ、来って……小田切秀雄　307
年表……328
索引……332

一、本文はまず手記編（第一部）、書簡編（第二部）に二大別し、これをさらに二つずつのブロックに分けた。あくまで編集上の便宜である。配列は各ブロックにおいて五十音順。

一、用字・用語についてはおおむね原文を保存すべくつとめたが、句読点は全面的に補足し、明らかな誤記は正した。漢字は現在通行の字体に改め、かなづかいは詩歌・候文などで全文一編をなしたものを除いて現代表記を採用した。「〇字不明」「ママ」等は編集者の判断により、振りがなのうち片カナは原文にあったもの、平ガナは編集者によって補ったものである。

装丁・重原　保男

第一部　若き魂

すめら皇国は
大丈夫の
かなしき生命
つみかさね
まけのまに〳〵
死かはり
生きかはりつゝ
栄ゆなり

（吹野国＝昭和二十年一月六日戦死）

悠久の散華

天野　進

九州帝国大学法文学部哲学科学生、昭和十八年十二月十日応召。昭和二十年七月六日南ボルネオ・バリックパパン北郊において戦死。

詠草四首

臨出陣述少思

戎衣(じゅうい)着る心はひたに国のため

故国出発の際

大御代に生命(イノチ)享けたるよろこびは何にまさらむただありがたし

男子(ヲノコ)はや何たゆたふべきことやあるただ君のため大君のため

雄々しくも征立(イデタ)たんかな剣太刀執り持ちはきて晴の船出を

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.